

御幸町だより

No.150 2023年4月9日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

『アイノタメ』 (マタイ 24:3~14)

牧師 村島 義也

旧約の預言者らは「剣と飢饉と疫病」の到来を告げ、これを罪の罰として警告し、人々に悔い改めを求めた(エレミヤ 14:12、エゼキエル 6:11 等)。短絡的に社会を襲う災禍を人間の罪に結びつける事は前近代的であり、要注意である。しかし一方、今や地球規模で「剣と飢饉と疫病」のリアルを感じる我々なのではないか。「剣」は軍事。2019年、教皇フランシスコは長崎を訪れた際こう語った、「今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活を強いられているにもかかわらず、武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは天に対する絶え間のないテロ行為です」。「飢饉」は、世界でも、身近な社会でも、深刻化する格差、貧困と飢餓の実際。「疫病」はこの数年の我々の経験そのものだ。

「終末時計」というのをご存じだろうか。1947年にアメリカの原子力科学者会報の表紙絵として考案され、0時を人類の滅亡とし、その15分前からの時計の図柄。核開発や戦争、環境破壊などへの警告を目的とするもので、毎年見直される。1月24日に2023年度版が発表されたが、過去最短を更新し残り時間90秒へ針が進んだ。これについての会報のプレスリリース、「ロシアによるウクライナ侵攻とそれに伴う核兵器使用のリスクが増大したこと、気候変動がもたらす継続的な脅威や、新型コロナウイルスなどの生物学的脅威に関するリスク低減に必要な国際規範や制度が機能停止に陥っていることも要因となった。」

聖書箇所は「小黙示」と呼ばれる終末に関する教えだが、帰結するところは「その日、その時は、だれも知らない。父だけがご存じである」「だから、目を覚ましていなさい」(マタイ 24:36、42)である。時の

詮索は無用だ。ただ、ここに描かれる世が終末の色を帯びる様を、我々は繰り返し歴史に見てきた。その意味で6節、「そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」であるか。

しかし、今日においてこそ「悔い改め」の喚起を見逃すべきではないだろう。「悔い改め」は聖書のギリシヤ語でμετανοια(メタノイア)。メタノイアは単なる懺悔ではなく、文字通りには「方向転換」。現在、「悔い改め(方向転換)」は、個人のみならず世界レベルの課題ではないだろうか。どういう方向への転換か。ロマ 12:9以下、Iコリ 10:24、ルカ 22:24~26等。つまり利己的な個人主義でなく、「愛」を動機とする行動や仕組みの変容。近年、世界の哲学者や有識者らの未来についての警鐘と提言が(コロナの背景もあって)注目されたが、例えば仏の経済学者・思想家ジャック・アタリ氏は「人類のサバイバルの鍵となるのは利他主義なのだ」と語る。

大きな話になったが、小さな我々に何が出来るだろう。でも主は言われる、「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である」(ルカ 16:10)。また映画『炎のランナー』の中のセリフ、「ジャガイモの皮でも完璧にむけば主を賛美することになる」。我々から始めねばならない。

世が終末の様相を呈する時、「多くの人の愛が冷える」(マタイ 24:12)という。冷え切ってしまうように我々は愛を語ろう。そうしたことを私たちから始めよう。誰かを思ってジャガイモの皮をていねいに剥こう。そんな風に努力し、祈り、愛を〈ことば〉とし、主を賛美しよう。偶然だがメタノイアを反対から読むと「あいのため」。そう、私たちは愛のために。